

令和 7 (2025)年度 水道土木奨学金事業 生活状況(中間)報告書



公益財団法人

水道土木振興財団

1. はじめに

当財団では、持続可能な水インフラの発展と地域社会の安全・安心に貢献する人材の育成を目的として「水道土木奨学金事業」を実施している。

2年目となる令和7（2025）年度は、全国の大学・大学院に在籍する多数の学生が奨学生として採択され、それぞれの立場から専門分野の学修・研究、地域社会への関わりに取り組んでいる。

本報告書は、奨学生から提出された生活状況（中間）報告書の内容を基に、学業・研究の進捗や生活環境の変化、奨学金支援による効果をまとめたものである。

2. 学生生活の状況（学業、部活、ボランティア、サークル等）

奨学生の多くは、大学での講義・実験・研究活動に意欲的に取り組んでおり、専門知識の修得に加え、課題解決型の学習や卒業研究、大学院での研究テーマに真剣に向き合っている。

ある学生は、水道管網の老朽化対策をテーマに研究を進める傍ら、土木系学会主催の現場見学会に参加し、実務者との意見交換を通じて理解を深めている。

また別の学生は、大学の防災サークルで防災訓練の企画運営に携わり、地域の子供たちに安全教育を行ったと報告している。

さらに、スポーツや文化系の部活動で主将や代表を務める学生もおり、組織運営やリーダーシップを学ぶ機会にもつながっている。

このように、奨学生たちは学業だけでなく、社会的・人間的成長を意識しながら日々を過ごしていることがうかがえる。

奨学金の支援により、アルバイト時間を減らし、講義や研究、課外活動に充てる時間が増えたという声が多く寄せられており、経済的支援が精神面・時間面の両面で効果を発揮している。

3. 活動成果と成長の実感

奨学生の研究テーマは、水環境保全、上下水道の維持管理、防災インフラ、流体解析、再生可能エネルギーの活用など多岐にわたっている。

学会や研究発表への参加、自治体や企業との共同研究、海外の技術動向調査など、専門分野の発展に資する活動も報告されている。

中には、研究で得た成果を卒業設計や論文にまとめ、全国コンペティションで入賞した学生もおり、学びを実践に結び付ける姿勢が見られる。

また、学外でのフィールドワークやインターンシップを通じて、「現場の課題を自らの研究に生かした」「地域の人々と交流し、技術者としての責任を感じた」といった声も多い。

語学や国際的視点の強化を目的に、英語試験（TOEFL 等）や語学学習教材に奨学金を充てた学生もあり、将来的に海外の水道・土木関連機関との連携を志す意欲が示されている。

4. 支援への感謝と今後への展望

奨学生の多くが、「奨学金によって経済的不安が軽減され、学業や研究に専念できた」と感謝の言葉を述べている。
なかには、「この支援がなければ大学院進学を断念していたかもしれない」という声もあり、支援の意義が深く実感されている。

今後については、**水道インフラの維持管理、災害対応、水環境保全、地域防災強化**など、社会課題の解決に寄与する分野で活躍したいという意志が多く見られた。

また、公共事業の現場に携わる公務員や、社会インフラを支える企業技術者、研究者を志す学生が増えており、「社会に貢献する技術者として成長していきたい」という前向きな姿勢が印象的である。

5. 総括

今年度の中間時点において、奨学生は学業・研究・社会活動のいずれにおいても主体的に取り組み、確実に成果を積み重ねている。

当財団の奨学金支援が、単なる金銭的支援にとどまらず、学生の挑戦意欲や将来への自信を育む大きな要素となっていることが明確である。

今後も当財団は、志ある学生を継続的に支援し、水道・土木分野の未来を担う人材育成に貢献していく。

学生の成長と活躍が、水と社会の持続可能な発展を支える原動力となることを期待し、本年度の生活状況（中間）報告をここに総括する。

以上